

早稲田ラグビーの戦術・戦法

The tactics and strategy of waseda rugby

1K03A025-6

氏名 今村雄太

指導教員 主査 寒川恒夫 先生 副査 中竹竜二先生

序章

早稲田大学ラグビー部は、大正7年に創部してから今までに関東大学ラグビー対抗戦、優勝31回、全国ラグビーフットボール選手権大会、優勝13回、日本ラグビーフットボール選手権大会、優勝4回という輝かしい戦績を残している。このような結果を残すには様々な研究、分析をして戦術、戦法を作り出さなければならない。試合で勝つために戦術戦法は不可欠である。

そこで、早稲田の戦術、戦法はどのようなものがあったのか。いつの時代に使われていたのか。そしてどのように移り変わってきたのかを調べていきたい。

また早稲田大学ラグビー部が勝つためには何が必要なのか調べていきたいと思う。

第一章 早稲田ラグビーの創世記 この時代は創世記であり、具体的な戦術、戦法などはなく、試合を組むのもやっとというほど苦勞をしていた時代であった。しかし、この時代で早慶戦が実施されたことは早稲田にとってとても大きな出来事であり、この早慶戦での敗戦がきっかけで打倒慶應の目標を掲げ、その目標を達成すべくこの日から早稲田が変わっていった。

第二章 初の全国優勝までの道程 昭和2年、早稲田にとって歴史的快挙オーストラリア遠征が実現した。オーストラリアチームの右に左にパス展開される目まぐるしいテンポの速いラグビーに攪乱され、自分たちもこうゆうラグビーをやろうと思い立った。そこで誕生したのが「ゆさぶり戦法」であった。

第三章 第1期黄金期 連勝街道を驀進して2年連続優勝を成し遂げこの2年間で公式戦20連勝を達成し、早稲田のゆさぶり戦法が完成した。しかし、早稲田は明治に連敗を喫しセブンシステムとエイトシステムの論議、模索に明け暮れた時代であった。

第四章 第2期黄金時代 昭和25年に大西鉄之祐が監督に就任し、5シーズンの間で負けを喫したのはたった2回だけである。大西氏の書いた「戦術ノート」では、緻密な研究、分析が行なわれ、早稲田の戦い方を生み出していた。

第五章 低迷期 この年代は部員の減少などの影響で早稲田は二部に転落してしまう。そこで、この二部から脱出したときに大きな力となった戦術がカンペイ戦術である。

このカンペイはその後世界でも通用し、日本では中心的な戦術となった。

第六章 第三期黄金期 この年代は、白星街道をひた走った良い時代であった。この10年間で日本選手権優勝3回、大学選手権優勝7回、対抗戦全勝優勝8回、公式戦35連勝、対抗戦60連勝など数々の記録は、10年間の成績としては考えられない最高のものであった。この第3期黄金時代に使われていた戦法が、セブンエース戦法、接近・展開・連続、ショートラインアウト戦法である。

第七章 試行錯誤の苦闘時代 この昭和50年代、早稲田はチャンピオン目指して一進一退を繰り返し、もがき苦しみ、試行錯誤の時代であった。自分たちの戦い方がはつきりせず、成績も伸び悩んでいた。この時代に使われていた戦法は縦十字戦法、ダブルライン戦法である。

第八章 昭和から平成の時代 アップ・アンド・アンダー戦法、ショートライン戦法を使った。アップ・アンド・アンダー戦法ではあまり結果を残すことが出来なかったが、ショートライン戦法では早稲田に必要なキープ・ザ・ボールを確実にさせるために短いライン、深いラインを引いてそれを精確なものにするのに大きく力になった。海外からの戦術を取り入れチャレンジした結果がこのような学生チャンピオンにつながった。

第九章 平成の黄金期 2001年から清宮氏が監督に就任し、様々な研究、挑戦で、低迷していた早稲田を5シーズンで対抗戦優勝5回、大学選手権優勝3回という成績を残している。

結章 まずラグビーチームにはそのチームのプレースタイルというものを持つことである。そしてそのプレースタイルについて分析、研究を重ねる必要がある。数値化することでより理解を深める。また、年代ごとにルール改正されていく。そのルール改正でまた新しい戦法、戦術を生み出す必要がある。そして海外からの戦術、戦法を取り入れることも必要である。これらのことが上手くかみ合い、成功している時代は勝利につながり、黄金の時代、強い早稲田が実現していると私は感じる。早稲田のラグビーから工夫、研究、分析、創造、努力のどれか一つでもかけてしまったら、早稲田のラグビーは危機に陥ってしまう。これからもさらなる目標、夢にむけて、新しいラグビーを創造していかなければいけない。